

2025 年度龍谷大学文学部考古学実習報告書



2026

龍谷大学文学部歴史学科文化遺産学専攻

例言

- 1 本冊は、龍谷大学文学部歴史学科文化遺産学専攻が 2025 年度に実施した考古学実習実習の調査報告書である。
- 2 考古学実習は、國下多美樹・木許 守（文化遺産学専攻教授）、奥村茂輝（同非常勤講師）が担当し、吉田野々（大学院博士課程、ティーティングアシスタント）が補佐した。
- 3 本文の執筆は、各実習担当者と受講者が行い、文責を文末に示した。
- 4 本書の編集は、担当教員の協力のもと、國下多美樹が担当した。
- 5 表紙の写真は、発掘実習として実施した周山 4 号墳の発掘調査風景である。

目 次

- 1 2025 年度考古学実習の概要・・・・・・・・・・・・・・・・（2）
- 2 考古学実習調査報告・大学保管資料の整理報告（その2）・・・・・・・・（5）

I 2025 年度考古学実習の概要

1 目的と概要

2025 年度の考古学実習は、考古学的調査・研究に不可欠な基礎的技術である、遺跡の調査法、遺構の検出と記録、遺物の観察と記録、報告書作成までの一連の過程、史跡の保存・活用を実践的に学び、考古学的なモノの見方、記録法を身につけることをねらいとして実施した。特に、フィールドワークを多く行った。3 人の教員によるチェーンレクチュアで、先史時代～近世までの遺構・遺物について基本的知識と方法の学習を実践的に学修した。夏期は、京都市右京区京北町で古墳の調査を実施した。

実習は、國下多美樹・木許守（文化遺産学専攻教授）、奥村茂輝（同非常勤講師）が担当した。また、ティーチングアシスタントとして吉田野々（博士後期課程 2 回）の協力を得た。実習参加者は、下記の通りである。

〔文化遺産学専攻（2 回生）〕

（ア）クラス

吉中俊輔、稲葉楓、長谷川暁平、大前玲温、辰巳優佳、福田さや、横関悠人、久保裕美子、辻本明日美、辻華子、松島明里、根来優成、立岡胡々、平野咲良、望月涼帆、谷口絢音、前田和花、室岡茜音、村瀬太嗣、山元美尋、相澤心珀、齊尾悠暉、平川桃愛、松浦あみ

（イ）クラス

惣埜遥菜、西村音々、唐澤友希恵、光眞坊多助、中嶋わかな、高野美優、甲斐朱莉、山西陽太、大西俊輔、岩本怜奈、三戸部恵、林太一、石川ひかり、高山遼悟、井上鉄太、奥野雄斗、吉田千聡、宝持魁人、古賀百華、建部結衣、佐藤美和、安藤佳那、大野涼、王佳璐

東洋史学専攻（2 回生）〕（ア）クラス 宮木朝寛
以下、各実習の概要について述べる。

2 実習の内容

〔1〕先史時代調査法

○弥生時代遺物の見方と解釈

深草遺跡の弥生土器を用いて、土器の観察、記録の基本的な方法を実習した。弥生土器は中期の壺の文様片を利用し、スケッチ、採択を行った。また、文様や調整の復原原体を使って、土器の表面の痕跡からどのような工具を使用していたのかを実習的に

学習した。（國下）

○古墳時代遺物の見方と解釈

陶器産須恵器の実物の杯身・杯蓋を用いて、古墳時代の須恵器の観察と実測を行った。各自が作成した実測図と実際の遺物を編年図（田辺編年・中村編年）に対照して須恵器の型式を比定し、実際に観察・実測した遺物の編年的位置を確認した。（木許）

〔2〕発掘調査実習

発掘調査の目的、方法についての講義を経て、調査開始までに測量実習を行った。（國下）

○遺構実測の実習

遺構実測実習は、大宮学舎北翼や南翼などの外構に明治期の煉瓦敷が遺存していることを受講生が確認したうえで、本館北側の渡り廊下部分および南翼入口部分に、現在復元的に設置されている煉瓦敷を遺構として実測した。受講生を 3～4 名で 1 班として編成し、各班で 1/20 の平面図を作成した。（木許）

○デジタル図化の実習（遺跡分布図の作成）

デジタル図化の基礎として、スキャナーや解像度など画像データを扱う際に必要な基礎知識を学修した。そして、地図データをソフト（Adobe Illustrator）上に配置し、必要な遺跡の範囲や位置をトレースしていくことで、遺跡分布図の作成方法を学んだ。この実習を通じて、必ずしも遺跡分布図でなくても、卒業論文などに使う挿図作成の基礎技術を習得できるように努めた。（木許）

〔3〕古代調査法

○古代～近世土器・陶磁器、その他遺物の調査法
飛鳥時代以降の土器、陶磁器、石製品などを分類することで遺物の観察や学修を行った。

○古代瓦の調査法、及び測量図・遺物実測図のデジタル化の実習

前期は、飛鳥時代から平安時代までの瓦の紋様変遷について学んだ。その知識をもとに、奈良市内の寺院跡（横井廃寺）から出土した軒瓦群について、それぞれの瓦の製作年代をグループで検討しその結果を発表した（写真）。また、前期終了時には帝塚山大学附属博物館（奈良県生駒市）の展示を見学し、軒瓦紋様のスケッチを行った（写真 4）。さらに本学所蔵の平川廃寺（京都府城陽市所在）出土瓦を用いて、拓本・実測の実習を行なった。受講生は一連の講義を通じて、古代の瓦の紋様が、仏像や寺院建

築物の装飾と同じ変遷を辿ることを学んだ。後期の初めには、遺物・遺構の測量図をデジタル化する方法を習得した。具体的には、先の実習において各自が作成した拓本・実測図をスキャナーを用いてデータし、AdobePhotoshop・AdobeIllustratorを用いてデジタルトレースし、卒論や書籍出版物等に使用できる図版の作成方法を学んだ。(奥村)

○平安宮跡の踏査と京都アスニー展示の見学

2025年11月16日(日)、平安宮大極殿に集合、京都アスニーで平安宮と平安京の全体像をイメージしたのち、平安宮大極殿跡、内裏跡を踏査した。調査によって明らかになった遺跡がどのように復元整備されているのかを現地で学修した。

○遺物写真撮影・文化財写真撮影実習

写真撮影の基本的な技術を実習した。カメラの種類、撮影データの種類、遺物撮影、屋外撮影の留意事項を実践的に指導した。

○土器実測実習

今年度は、土器実測の実習時間を増やして全員が一定水準の土器実測を行うことができるように指導を行った。(以上、國下)

〔4〕2025年度考古学実習カリキュラム

第1回 4/9 國下多美樹 導入、実習の心得

第2回 4/16 國下多美樹 遺構実測の実習1

座標計算の方法、TS測量、電子平板

第3回 4/23 木許守 遺構実測の実習2 水準測量

第4回 4/30 木許守 遺構実測の実習3 平面図

第5回 5/7 木許守

遺構実測の実習4 立面図・断面図

第6回 5/14 木許守 古墳時代の金工技術の見方と

解釈 藤ノ木古墳金工模造品

第7回 5/28 國下多美樹 弥生土器の見方と解釈1

深草遺跡弥生土器

第8回 6/4 國下多美樹 弥生土器の見方と解釈2

深草遺跡弥生土器

第9回 6/11 國下多美樹 奈良時代の土器の見方

と解釈1 井ノ内遺跡土器

第10回 6/18 國下多美樹 奈良時代の土器の見方

と解釈2 井ノ内遺跡土器

第11回 6/25 奥村茂輝 古代瓦の見方と解釈1

平川廃寺出土瓦類

第12回 7/2 奥村茂輝 古代瓦の見方と解釈2

平川廃寺出土瓦類

第13回 7/12(振替)奥村茂輝 博物館所蔵瓦の

見学、帝塚山大学附属博物館

第14回 7/16 奥村茂輝 中・近世瓦の見方とその

解釈1 西本願寺関連・東甕出土近世瓦

第15回 7/23 奥村茂輝 中・近世瓦の見方とその

解釈2 西本願寺関連・東甕出土近世瓦

第16回 9/24 奥村茂輝 デジタル図化の実習

1 遺物実測図のトレース

第17回 10/1 奥村茂輝 デジタル図化の実習

2 遺構図のトレース1

第18回 10/8 奥村茂輝 デジタル図化の実習

3 遺構図のトレース2

第19回 10/15 木許守 デジタル図化の実習

4 遺跡分布図の作成1

第20回 10/22 木許守 デジタル図化の実習

5 遺跡分布図の作成2

第21回 10/29 國下多美樹

平安時代以降の土器類の見方と解釈

第22回 11/5 國下多美樹

平安時代以降の陶磁器類の見方と解釈

第23回 11/16(振替日) 國下多美樹

平安宮跡フィールドワーク

第24回 11/19 國下多美樹 遺物写真撮影の実習1

第25回 11/26 國下多美樹 遺物写真撮影の実習2

第26回 12/3 國下多美樹

出土品・図の整理・保管 報告書の作成

第27回 12/10 木許守

出土品・図の整理・保管 実測実習 古墳時代須恵器

第28回 12/17 木許守

出土品・図の整理・保管 実測実習 古墳時代須恵器

第29回 12/24 國下多美樹

図の整理・保管 実測実習 近世陶磁器

第30回 1/7 國下多美樹

図の整理・保管 実測実習 近世陶磁器

〔5〕発掘調査

2025年8月18日(月)～8月31日(日)、京都市右京区京北下町折谷地内(京都京北小中学校内)に所在する周山3・4号墳の発掘調査を実施した。

周山古墳群は、古墳時代中期から後期の首長墓を含む古墳群と見られており、本学が継続調査をしている。今年度は、3号墳、4号墳の墳丘から墳裾までトレンチを設定し、形態、規模等の確認を行った。その結果、3号墳は古墳ではなく、削り残された地形に古代に地層が堆積したものと判明した。また、4号墳は墳裾を確定できず、形態も含めて再考することが課題路となった。また新たに、縄文時代の遺物を入手し、付近に遺跡の存在を明らかにできた。詳細は、『龍谷大学文学部考古学実習室』2026を参照されたい。(國



写真1 遺構実測の実習



写真2 水準測量の実習



写真3 瓦の年代を検討するグループ作業



写真4 帝塚山大学附属博物館にて学外実習



写真5 弥生土器の観察と拓本実習



写真6 周山4号墳の調査状況



写真7 地元中学生の見学（周山4号墳）



写真8 周山4号墳調査のミーティング風景

Ⅱ 考古学実習調査報告・大学保管資料の整理報告（その2）

毎年、考古学実習調査報告として、大学が保管している考古資料の公表を進めている。今年度は、次の資料を対象に資料化を進めた。

（1）小川貫弉氏採集資料（記号：OK）

岐阜県各務原市蘇原の永厳寺住職、小川徳水氏より、2023年4月13日に大学に寄贈された資料である。この契機になったのは、前年の2022年10月18日に、本学大学院修士課程であった前田詞子氏（現松江市教育委員会）が、本寺院保管の資料の資料調査を行った際に、住職から寄贈についての依頼を受けたことであった。先代で中国仏教史学者である小川貫弉氏から受け継いだ考古資料で、その保管に苦慮されているとのことであったから、大学の考古学教育のための教材としてお引き受けすることにした。

寄贈資料は、2022年の資料調査の際に、写真記録を行い、リストを作成した（表2）。原始～近代に及ぶ各種の考古資料であるが、どのような地点でいつ採集されたかについての詳細な記録は残されていない。整理作業は、保管状態の写真撮影後、コンテナに再整理し、小川氏採集品としてOKコード貫弉氏採集資料を付して遺物を整理した。今回、古

墳時代から飛鳥時代の採集資料を一部を資料化できたので、公表することにしたい。

（2）宇佐晋一氏採集・保管資料（記号：USA）

京都市伏見区在住の故宇佐晋一氏（1927～2025）は、直弧文研究など多くの業績を残した在野の考古学者である。氏は、國下が京都市伏見区の深草遺跡の研究を進めている中で、親交を深めた考古学者であった。宇佐氏の業績は枚挙にいとまがないが、直弧文研究についての成果が最近報告された（宇佐・斎藤 2025、宇佐・井上 2025）。

生前、龍谷大学が深草遺跡をかつて調査した経緯から、氏の保管されていた深草遺跡資料についても大学に寄贈される意思を示されていた。宇佐氏が逝去されたあと、ご事情をよくご存知のご遺族から寄贈のご依頼があり、2025年7月10日にご自宅に伺い、受け入れた次第である。なお、自宅には深草遺跡以外の資料も保管されており、その処遇に苦慮されていたことから、大学の教材としての活用を前提に一括で受け入れさせていただいた（表1）。今回は、保管資料のうち、古墳時代遺物を中心に一部の資料化を行った。山陰地方の古墳出土資料も含まれ、学術上の成果も大きい。

（3）坂下勝美氏採集・保管資料（記号：SAK）

京都府向日市在住の坂下勝美氏が乙訓地域を中心に採集した資料である。旧石器～近世に至る土器類、瓦類、石製品、金属製品がある。遺物に採集地点と採集日の詳細をラベルが同封されており、遺跡と関連付けて説明できる資料が多い。すでに、『2023・2024年度龍谷大学文学部考古学実習報告書』龍谷大学文学部文化遺産学専攻 2025年で一部を報告しているので、合わせて参照願いたい。

なお、遺物の実測、トレース、写真撮影は須藤ひより、川崎優和、千代結菜、（文化遺産学専攻2回生）、吉中俊輔（同3回生）、安國有馬（同4回生）、原田しいな（文化遺産学専攻2025年度卒業生）が分担し、以外は國下が担当した。公表に際して、一色さつき氏、小川徳水氏、坂下勝美氏のご協力を得た。感謝申し上げます。（國下多美樹）

西蔵寺所蔵考古資料調査写真記録 2022年10月19日

龍谷大学 國下多美樹・前田詞子・藤田雄介・菊池万里・池浦里咲



写真1 小川貫弉氏採集資料

表－１ 小川貫弉氏採集・保管資料一覧－１（2020.10.19 調査）

整理箱ナンバー	採取地	時代	遺物種類	個数
1-A木箱	不明	飛鳥時代	須恵器 杯身 杯H蓋	2
1-A	不明	古墳後期	須恵器 甕	2
1-A	不明	古墳～平安	須恵器 体部	1
1-A	不明	中世	瀬戸・美濃 皿	2
1-A	不明	近世・近代	鉄釉陶器	2
1-A	不明	近代	緑釉陶器	1
1-B方形植木鉢	不明	9世紀前半	灰釉陶器 碗・皿類	3
1-B	不明	9世紀前半	灰釉陶器 壺 把手	1
1-B	不明	9世紀前半	美濃須衛 須恵器 甕 口縁体部	1
1-B	不明	現代	植木鉢	1
1-B	不明	現代	青磁	1
2-A段ボール箱	不明	縄文	打製石器 凹基無茎式	23
2-A	不明	弥生	打製石器 凸基有茎式	5
2-A	不明	縄文～弥生	打製石器 凸基無茎式	2
2-A	不明	古墳	須恵器 杯H	2
2-A	不明	古墳	須恵器 杯H 蓋	5
2-A	不明	古墳	須恵器 礎	1
2-A	不明	古墳	須恵器 美濃須衛 甕 頸部 体部片	7
2-A	不明	古墳	須恵器 壺 頸 破片 首部	1
2-A	不明	古墳	溶着した須恵器 甕 壺	2
2-A	不明	近世	磁器 皿	1
2-A	不明	近世	陶器	4
2-A	不明	近世	窯道具	1
2-A	不明	現代	鉢植え	1
2-B段ボール箱	不明	現代	植木鉢	1
2-B	不明	古墳	横瓶 横穴式石室副葬品 関係品	1
2-B	不明	古墳	須恵器 杯H	3
2-B	不明	古墳	須恵器 杯H蓋	1
2-B	不明	古墳	須恵器 高杯（長脚2段 透かし高杯）	3
2-B	不明	古墳	須恵器 皿	2
2-B	不明	古墳	須恵器 甕	8
2-B	不明	近代	陶器	2
3-A植木鉢	不明	中世	美濃焼 皿	1
3-A	不明	中世	輪花皿	1
3-A	不明	近世	陶器	10
3-A	不明	近世	染付	2
3-A	不明	近世	施釉陶器 皿	1
3-A	不明	近世	赤絵皿	2
3-A	不明	近世	鉄釉陶器	3
3-A	不明	近世	白釉陶器	1
3-A	不明	近代	陶器 大皿	2
3-A	不明	現代	植木鉢	1

表－２ 小川貫弑氏採集・保管資料一覧（その２） 2020.10.19 調査

整理箱ナンバー	採取地	時代	遺物種類	個数
3-B段ボール箱	不明	古墳	須恵器 坏H	3
3-B	不明	奈良～平安	須恵器 壺の肩部	1
3-B	不明	奈良～平安	須恵器 蓋	1
3-B	不明	奈良～平安	須恵器 皿	2
3-B	不明	奈良～平安	美濃須恵 甕 口縁部	1
3-B	不明	奈良～平安	美濃須恵 体部 （窯資料癒着）	5
3-B	不明	現代	碇子	1
3-B	不明		自然石	1
4木箱	不明	古墳	須恵器 杯H	2
4	不明	古墳	須恵器 杯H 蓋	2
4	不明	古墳	須恵器 甕 口縁部	3
4	不明	古墳後期	須恵器 高杯	1
4	不明	飛鳥	高杯	2
4	不明	奈良・平安時代	須恵器 甕	15
4	不明	奈良・平安時代	須恵器 杯蓋（宝珠型）	1
4	不明	現代	和ばさみ	1
4	不明	平安時代	灰釉陶器 椀・皿類（内2点癒着）窯資料	13
4	不明	平安時代	灰釉陶器 壺	1
4	不明	平安時代	須恵器 壺	24
4	不明	平安時代	土師器	1
4	不明	平安時代	陶器 溶着 窯資料	1
4	不明		サヌカイト	1
4	不明	近世	陶器 小壺	1
5-A木箱	不明	縄文中期初頭	縄文土器 円筒式土器	1
5-A	不明	平安時代	須恵器	4
5-A	不明	平安時代	須恵器 把手	1
5-A	不明	平安時代	灰釉陶器 椀	1
5-A	不明	平安時代	灰釉陶器 壺	2
5-A	不明		鉄釉陶器	1
5-A	不明		白鳳の軒平瓦	1
5-A	不明		岩石標本	20
5-A	不明		貝	1
5-B	不明	縄文	打製石鏃 凹基無茎式 サヌカイト	13
5-B	不明	縄文	打製石鏃 凸基有茎式 サヌカイト	5
5-B	不明	縄文	打製石鏃 凸基無茎式 サヌカイト	1
5-B	不明		土錘	1

表－3 宇佐晋一氏採集・保管資料一覧（その1）2025.7.10 調査

整理No.	資料名	遺跡名	保管箱
USA- 1	弥生土器	深草遺跡	木箱
USA- 2	弥生土器	深草遺跡	木箱
USA- 3	弥生土器	深草遺跡	木箱
USA- 4	弥生土器	深草遺跡	木箱
USA- 5	弥生土器	深草遺跡	木箱
USA- 6	弥生土器	深草遺跡	木箱
USA- 7	弥生土器	深草遺跡	木箱
USA- 8	弥生土器	深草遺跡	木箱
USA- 9	弥生土器	深草遺跡	木箱
USA-10	弥生土器	深草遺跡	木箱
USA-11	瓦類	法琳寺跡	コンテナ
USA-12	弥生土器	深草遺跡	木箱
USA-13	瓦類	幡枝瓦窯	コンテナ
USA-14	須恵器	不明	コンテナ
USA-15	弥生土器ほか	不明	コンテナ
USA-16	土器類	金右衛門垣内遺跡、井出寺跡、隠岐国分寺跡	コンテナ
USA-17	瓦類	大日寺、篠、二条城前、不明	コンテナ
USA-18	埴輪	不明	コンテナ
USA-19	古式土師器	不明	コンテナ
USA-20	古墳～近世	不明	コンテナ
USA-21	弥生土器	深草遺跡	コンテナ
USA-22	瓦類	法勝寺	コンテナ
USA-23	瓦類	幡枝瓦窯	コンテナ
USA-24	瓦類	深草廃寺	コンテナ
USA-25	瓦類	東福寺	コンテナ
USA-26	瓦類	かんぜんどう廃寺	コンテナ
USA-27	瓦類	元稻荷窯	コンテナ
USA-28	瓦類	甲賀寺、北野廃寺、六道珍皇寺、法琳寺ほか	コンテナ
USA-29	瓦類	甲賀寺、北野廃寺ほか	コンテナ
USA-30	土器類	総山遺跡	コンテナ
USA-31	瓦類、土器類	不明	コンテナ
USA-32	瓦類	不明	コンテナ
USA-33	須恵器	牛尾須恵器窯、	コンテナ
USA-34	瓦類	市内各所	コンテナ
USA-35	瓦類	深草廃寺、夏見廃寺	コンテナ
USA-36	瓦類	万寿寺ほか	コンテナ
USA-37	土器類	岩倉	コンテナ
USA-38	瓦類	不明	コンテナ
USA-39	弥生土器	金右衛門垣内遺跡、美濃山廃寺	コンテナ
USA-40	須恵器	百塚古墳群	コンテナ
USA-41	瓦類	広野廃寺	コンテナ
USA-42	瓦類	がんぜんどう廃寺	コンテナ
USA-43	須恵器	不明	コンテナ
USA-44	埴輪・円筒棺	岡山美作久世町	コンテナ
USA-45	弥生土器	金右衛門垣内遺跡	コンテナ
USA-46	弥生土器	金右衛門垣内遺跡	コンテナ

表－４ 宇佐晋一氏採集・保管資料一覧（その２）（2025.7.10 調査）

整理No.	資料名	遺跡名	保管箱
USA-47	土器類	不明	コンテナ
USA-48	土器類	不明	コンテナ
USA-49	土器類	土師七つ塚	コンテナ
USA-50	土器類	土器類	コンテナ
USA-51	土器類	不明	コンテナ
USA-52	瓦類	森寺	コンテナ
USA-53	弥生土器	深草遺跡	コンテナ
USA-54	欠番		
USA-55	土師器	総山遺跡	コンテナ
USA-56	土師器	幡枝元稲荷窯	コンテナ
USA-57	土師器	幡枝元稲荷窯	コンテナ
USA-58	土師器	総山遺跡	コンテナ
USA-59	欠番		
USA-60	土師器	幡枝元稲荷窯	コンテナ
USA-61	土師器	幡枝元稲荷窯	コンテナ
USA-62	土師器	油小路	コンテナ
USA-63	土師器	総山遺跡	コンテナ
USA-64	土師器	幡枝元稲荷窯	コンテナ
USA-65	須恵器	天智陵付近	コンテナ
USA-66	瓦類	東福寺	コンテナ
USA-67	土器類	木津川河床遺跡	コンテナ
USA-68	土器類	高波遺跡 珠洲市	コンテナ
USA-69	土師器	幡枝元稲荷窯	コンテナ
USA-70	土器類	三条新町	コンテナ
USA-71	弥生土器	南山遺跡	コンテナ
USA-72	土器類	五条油小路	コンテナ
USA-73	瓦類	滋賀里遺跡ほか	コンテナ
USA-74	各種	二条城前、高山寺貝塚	コンテナ
USA-75	弥生土器	唐古・鍵遺跡	コンテナ
USA-76	土器類	不明	コンテナ
USA-77	須恵器	元稲荷窯か	コンテナ
USA-78	埴輪	墓山古墳	コンテナ
USA-79	瓦類	音如ヶ谷窯	コンテナ
USA-80	瓦類	夏見廃寺	コンテナ
USA-81	瓦類	不明	コンテナ
USA-82	瓦類	広野廃寺	コンテナ
USA-83	土器類	不明	コンテナ
USA-84	土器類	不明	コンテナ
USA-85	弥生土器	深草遺跡	コンテナ
USA-86	埴輪	庵寺山古墳	コンテナ
USA-87	瓦類	不明	コンテナ
USA-88	土器類	北花山	コンテナ
USA-89	弥生土器	深草遺跡	コンテナ
USA-90	弥生土器	深草遺跡	コンテナ

Ⅱ－１ 東福寺採集の均整唐草文軒平瓦（整理 No.USA34 － 13）

須藤ひより（文化遺産学専攻 L250904、2 回生）

1 出土地・出土年月日

「東福寺方丈ノ西採集」とある。出土年は不明。

2 遺物の概要

軒平瓦である。均整唐草文軒平瓦で、瓦当面の右 1 / 2 が残存する。内区を中心飾りは、釣鐘状を呈し、唐草文を 5 反転配置する。内区と外縁の間に圈線がある。唐草文は丸みを帯びており、高さは約 0.2cm である。脇区に范傷が 2 箇所みられる。顎部は段顎で、貼り付け技法により成形されている。

平瓦部凹面は経 9 本、緯 7 本程 / cm の布目痕があり不調整であるが、部分的にナデがみられる。

また瓦当端から 1cm はヨコケズリである。凸面と右側縁はタテケズリである。瓦当面裏面にヨコナデがみられる。瓦当下縁にもヨコナデがみられる。左側縁と狭端面は欠陥している。胎土は粗く 1.0mm ～ 2.0mm 大の長石をやや多く、2.0mm 大の石英、1.0 ～ 1.5mm 大の黒色粒、3.0mm 大の花崗岩質岩片を少量含む。硬質焼成で、表面は 10YR6 / 2 灰黄褐色、断面 2.5Y6 / 2 灰黄色である。

本資料は、中期Ⅲ期の京都産の軒平瓦であると考えられる（山崎 2000）。

参考文献

山崎信二 2000『中世瓦の研究』奈良文化財研究所

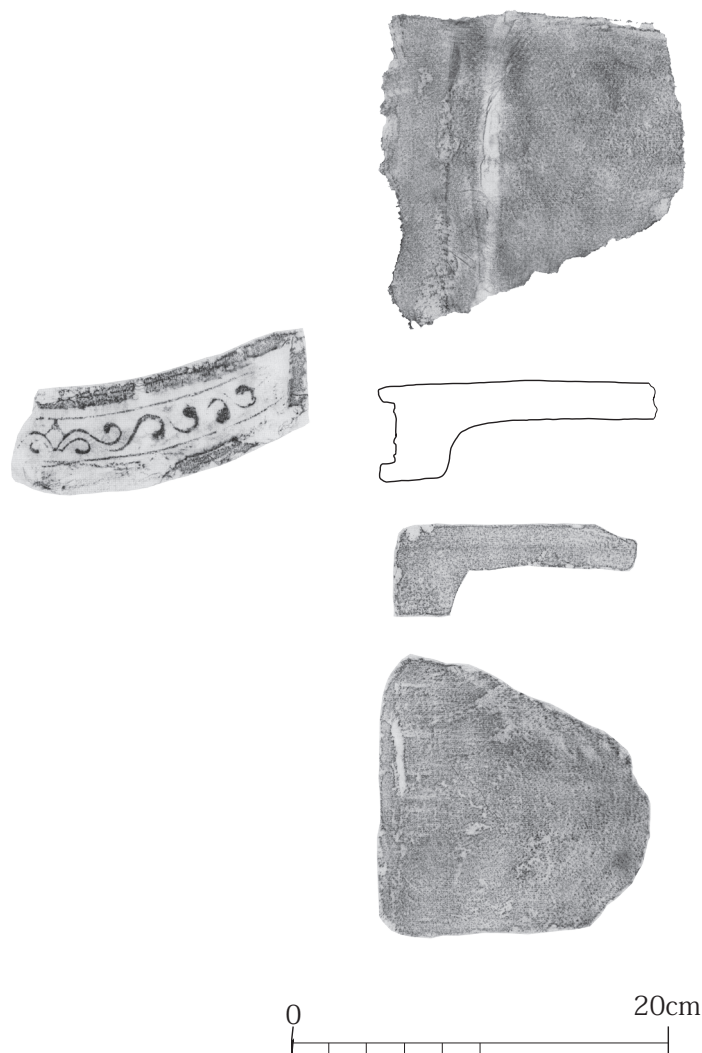


図1 軒平瓦実測図（須藤実測・採拓・トレース）



瓦当面



瓦当右侧縁



平瓦部凹面



平瓦部凸面



左侧縁破面



瓦当平瓦部裏面

写真2 軒平瓦部位写真（須藤撮影）

Ⅱ－２ 東福寺採集の三ツ巴文軒丸瓦（整理 No.USA34-14）

川崎優和（文化遺産学専攻 L250887、2 回生）

1 出土地・出土年月日

裏面に「十四、三、十八、東福寺」と朱書され、1939 年（昭和 14）3 月 18 日に東福寺で採取されたものである。

2 遺物の概要

三巴文軒丸瓦である。瓦当面の下約 1／6 が残存する。内区には、巴文の頭部と尻部が残存しており、高さ 0.7cm の巴部は丸みを帯びて巻きが長い特徴をもつ。

外区には、径 1.1cm、高さ 0.2cm の珠文が 4 個残存し、それぞれ珠文の角が丸みを帯びている。

外区の内・外側には、高さ 0.1cm の圏線がそれぞれ残っており、隆起が明瞭である。

瓦当裏面はナデ調整であり、瓦当裏面左側には丸瓦部との接合痕跡がある。周縁についても同様にナデ調整が施されている。

胎土は粗く、0.5mm 大の長石とチャートをやや多く含む。硬質焼成で、表面 5Y5/1 灰色、裏面 5Y6/1 灰色、断面 7.5Y5/1 灰色である。

文様の特徴から、中世の所産と見られる。



図 2 __三巴文軒丸瓦実測図・拓影（川崎実測）



写真 3 __三巴文軒丸瓦部位写真（川崎撮影）

Ⅱ－3 出土地不詳の須恵器大型器台（整理 No.USA51-1）

千代結菜（文化遺産学専攻 L250888、2 回生）

1 出土地・出土年月日

採集地点・出土年ともに不詳。

2 遺物の概要

須恵器大型器台の杯部片である。口縁部上位、同下位の計 4 片がある。

形態は、鉢形を呈す。脚部側から丸みをもって立ち上がり、口縁部にかけて外湾する。口縁端部は上方に尖らせ気味に突出し、外傾する端面を作り出す。口縁端部の直下に明瞭な凸帯を 2 条めぐらし、中位に不明瞭な凸帯と凹線を各 1 条、下位に凹線を 1 条施す。

凸帯群と凹線の間には、櫛描波状文を一带ずつめぐらしている。櫛描波状文の原体は 7～8 条／帯

である。凹線の下部は平行叩きである。叩き目は木目直交の原体で、3 条／cm である。内外面ロクロナデ調整である。内面は叩きの当て具痕をナデ消している。

胎土は緻密で、長石（1.0～3.0mm）を少量含む。硬質焼成である。色調は内外面が灰色、断面が赤褐色である。外面に灰白色の自然釉がある。復原口径は 36.6cm、残存高は 9.3cm である。

TK23 型式の所産である。

参考文献

田辺昭三ほか『陶邑古窯址群Ⅰ』平安学園考古学クラブ 1966 年

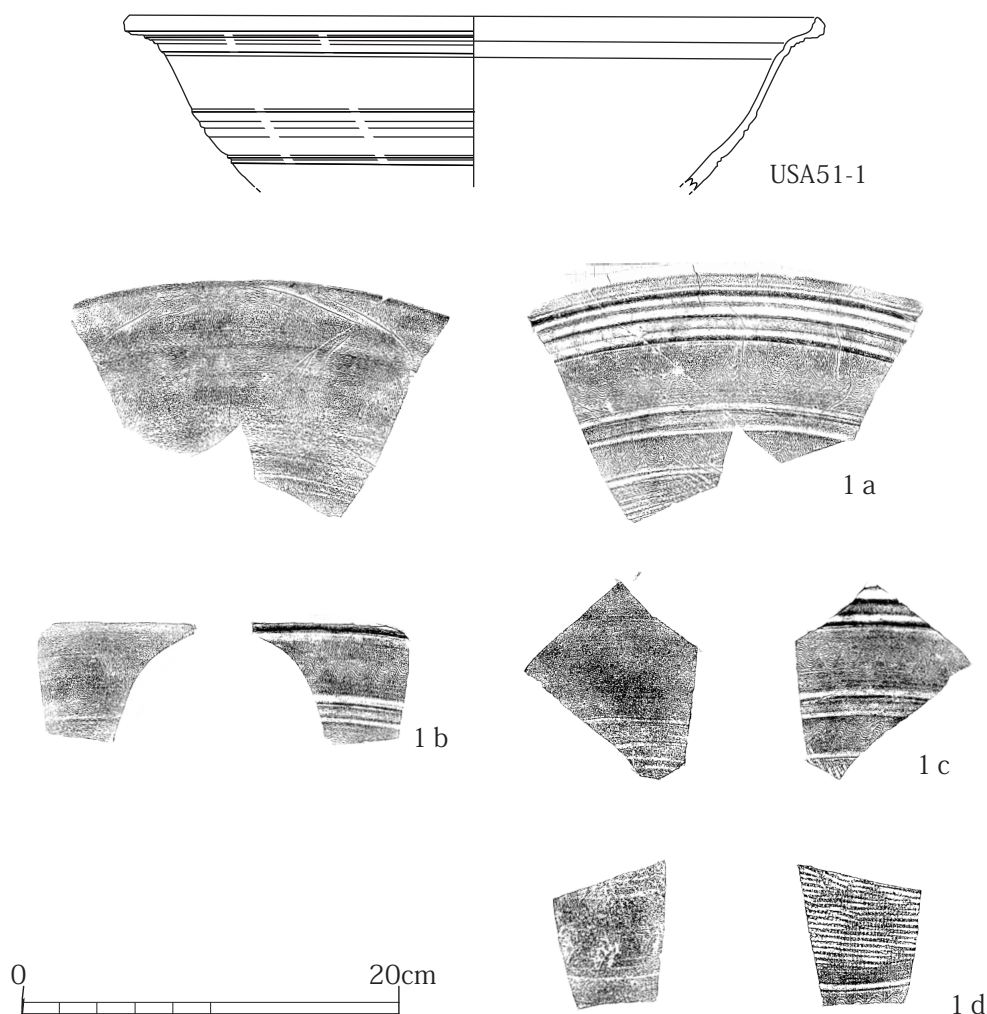


図3 遺物実測図（千代実測）

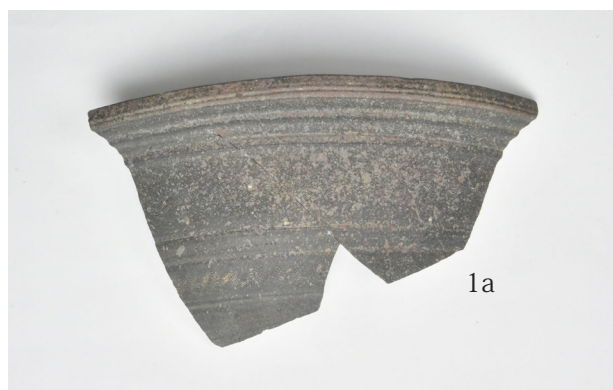


写真4 須恵器大型器台写真－1(左:内面、右:外面、千代撮影)

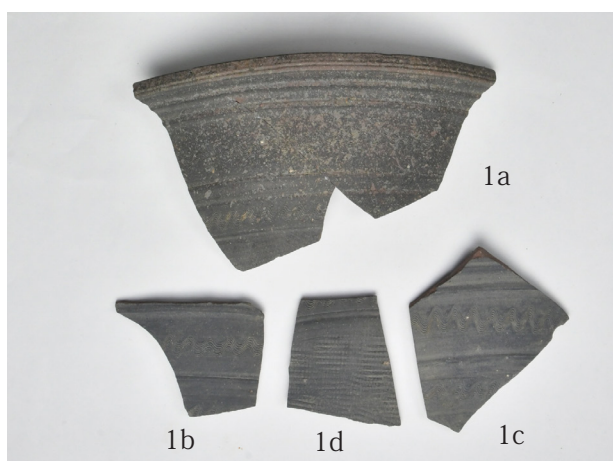
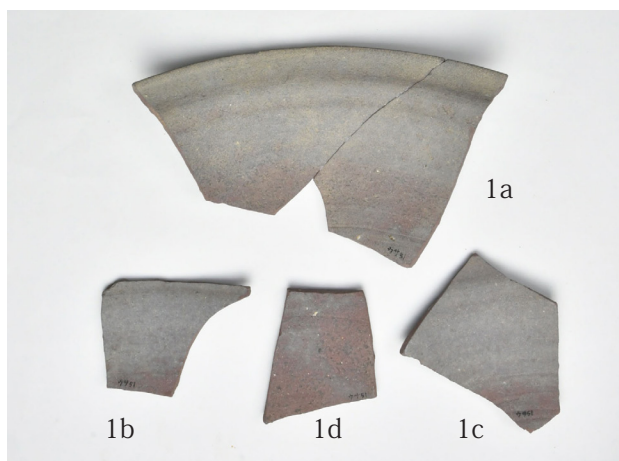


写真5 須恵器大型器台写真－2(左:内面、右:外面、千代撮影)

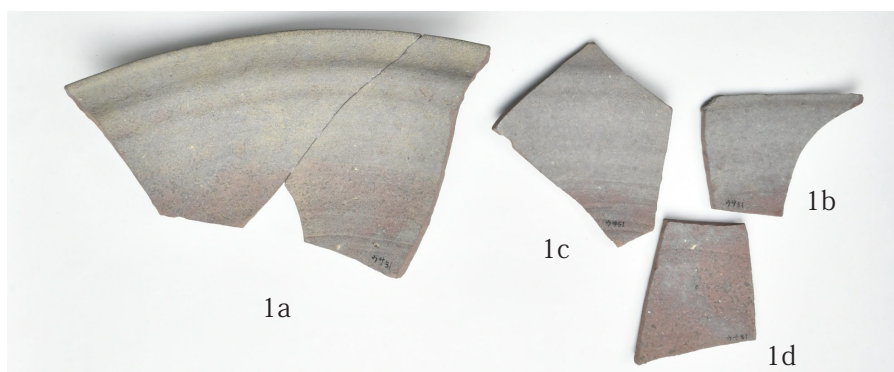
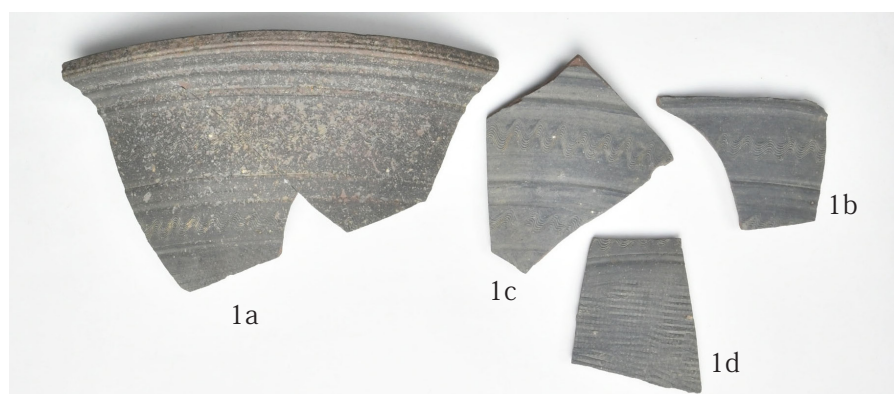


写真6 須恵器大型器台写真－3(左:内面、右:外面、千代撮影)

Ⅱ－４ 百塚古墳・多田古墳出土の古墳時代須恵器－１（整理 No.USA40－１～３）

吉中俊輔（文化遺産学専攻、L230852 3 回生）

１ 出土地・出土年月日

USA40－１は、「伯耆大山山麓百塚出土」と記述されたメモが内部に残されており、現在の鳥根県米子市、（旧淀江町）に所在する百塚古墳群で採集されたと考えられる。

USA40－２は、「美作 多田古墳久世 1947.8.27」と墨書で口縁部外面に残されており、岡山県真庭市、（旧久世町）の多田古墳群で 1947 年 8 月 27 日に採集されたと考えられる。

USA40－３は出土地、出土年月日ともに不明である。

２ 資料の特徴

いずれも須恵器である。USA40－１は短頸壺、USA40－２は杯身、USA40－３は杯蓋である。

USA40－１は短頸壺体部である。口頸部は残存していないが、体部は完存している。

形態は最大径が体部の中程よりやや上位にあり、肩部は緩やかに内湾しながら肥厚し頸部の接合部にかけて薄くなる。法量は残存高 7.8cm、体部径 11.9cm である。口径は口頸部が残存していないので不明である。

成形方法は体部を成形した後に口頸部を接合している。焼成方法では、外面には自然釉が片側に集中して肩部から底部にかけて付着しており、自然釉の付着が少ない側の外面底部には、円弧状に周囲とは異なる色調を呈する部分が確認できる。これらのことから、口頸部を斜め上に向けた状態で、他の製品に重ねる形で焼成されたと考えられる。

内面調整はナデ調整である。外面調整は上位 2/3 を回転ナデ、下位 1/3 を不定方向のヘラ削りする。カキメは施されていない。

胎土は良好で 0.5 mm から 3 mm 大の長石を含む。焼成は硬質ある。色調は 5 Y7/1 灰白、自然釉が 7.5 YR4/3 暗オリーブである。

正確な型式は口縁部が残存していないが体部最大径が 12cm であること、外面にカキメが施されないことから TK209 型式と推測される。

USA40－２は、杯身である。残存率は完形である。

形態は、立ち上がりは、内傾しながら、口縁端部を丸くおさめる。受け部は、体部との区別が不明瞭



図４ 鳥根県米子市百塚古墳群
(地理院地図に加筆、1/10,000)



図５ 岡山県真庭市多田古墳群
(地理院地図に加筆、1/10,000)

で、平坦面を作らず曲面である。全体の形状も扁平である。法量は口径 10.9cm、器高 4.8cm である。

調整は、内面が回転ナデ、外面が口縁部から 4.5cm を回転ナデ残りの底面までの 3 mm に回転ヘラ削りを施すが回転方向は砂粒が確認できないため、同定できない。底面にヘラ起こしの痕跡がみられる。

胎土は良好で 0.5mm 大の長石と黒色粒を含む。焼成は硬質である。色調は、内外面ともに 10Y 6/1 灰白である。

上記の形態的特徴より、TK209 型式から TK217

型式に相当する。

USA40—3は、杯蓋である。残存率は約1/2である。形態は、外面の体部と天井部を区画する稜は完全に退化し痕跡もない。口縁部はやや内傾しながら、端部を丸く収めている。

法量は口径13.7cm、器高4.7cmである。

調整は口縁部から2.9cmを回転ナデ、一部を削りの後ナデ、天井部までの1.3cmが回転ヘラ削りである。内面は回転ナデである。

胎土はやや粗く0.5～5mm大の黑色粒と長石を含む。焼成は硬質である。色調は7.5 Y 6/1 灰である。

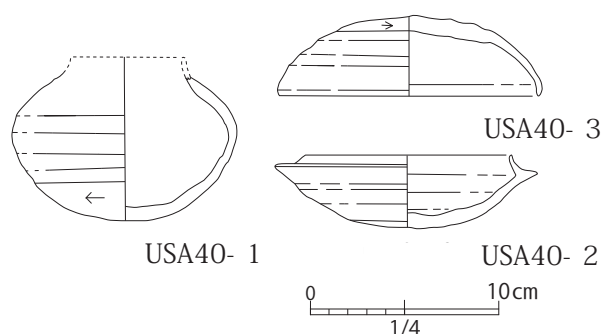
上記の形態の特徴からT K 209型式から、T K

217 型式に相当する。

参考文献

田辺昭三 1981『須恵器大成』角川書店

中野雅美 1991『古墳時代の研究』第6巻 土師器と須恵器 雄山閣



古墳時代須恵器〔短頸壺(USA40-2) 杯蓋(USA40-4)
杯身(USA-3)〕

図6 須恵器実測図(吉中実測・トレース)



写真7 須恵器杯蓋 USA40- 3



写真8 須恵器杯身 USA40- 2



写真9 須恵器短頸壺 USA40- 1

Ⅱ－5 伯耆地域・百塚古墳出土の古墳時代須恵器－2（整理 No.USA40－4）

原田しいな（名古屋大学大学院、2025 年度卒業生）

1. 出土地・年月日

遺物とともに保管してあったメモ紙には、「伯耆大山山麓百塚出土」との記載があった。伯耆とは、律令制下の国名で、現在の鳥取県中西部（倉吉市・米子市周辺）にあたる。そして、当該地には、標高 1729 m の中国地方最高峰の大山がそびえ立っている。そして、大山の北西部には、縄文時代から中世にかけての複合遺跡である百塚遺跡群（鳥取県米子市）があり、本遺跡群内には、124 基の百塚古墳群が形成されている（米子市文化財団 2022）。記載してある「大山山麓百塚」とは、おそらく百塚古墳群にあたる。以上のことから、本高杯は、鳥取県米子市百塚遺跡群の百塚古墳群から出土したものと考えられる。

2. 資料の特徴

須恵器有蓋短脚高杯である。杯部が一部破損しているが、ほぼ完形である。口縁部はほぼ垂直に立ち上がり、端部は内面に段を構成する。受部はやや斜め上に引き出される。脚部はハの字に開き、裾部付近で内湾する。脚端部は内面に内傾した面をもつ。スカシ穴は円形を呈し、3 方向に開けられる。内外面はロクロナデ調整をし、杯部底部外面はその後 1/3 程度回転ヘラケズリ調整をする。砂粒が右に動いていることから、回転ヘラケズリ調整の際のロクロ回転方向は左である。内面を観察すると、粘土紐が右方向に巻かれていることから、この時のロクロ回転方向も左である。また、回転ヘラケズリ調整の後には、杯部と脚部の接合時に施されたと思われる

ナデがみられる。

胎土は密で、直径 1mm の長石をやや多く含む。焼成は硬質だが、一部不良である。色調は、外面が明青灰、内面・断面が灰白である。法量は口径 11.1cm、受径 12.9cm、器高 9.7cm、脚高 4.3cm、底部径 7.5cm である。

年代については、萩本勝氏らによる陰田編年を用いる（萩本・佐古 1998）。陰田編年では、陰田遺跡群（古墳・横穴墓）出土の蓋杯を中心に、5 世紀後半～8 世紀を 10 期区分として編年を組み立てている。本編年に基づくと、本高杯は、口縁部の立ち上がりが長く、ほぼ垂直に立ち上がることや、口縁端部内面に段を構成すること、1/3 程度の回転ヘラケズリ調整をすることから、陰田－1（～6 世紀初頭）の所産となる。また、本高杯はその形態的特徴から、陶邑窯の田辺編年 T K 47 型式（田辺 1966・1981）における形態的特徴と酷似していることから、陶邑窯の影響下で成立した地方窯産の須恵器であると考えられる。

参考文献

- 一般財団法人 米子市文化財団 2022『鳥取県米子市 百塚 88 号墳・百塚 7 遺跡』（一般財団法人米子市文化財団埋蔵文化財発掘調査報告書 24）
- 萩本勝・佐和枝 1998「須恵器について」『陰田』米子市教育委員会
- 田辺昭三 1966『陶邑古窯址群 I』平安学園考古学クラブ
- 田辺昭三 1981『須恵器大成』角川書店

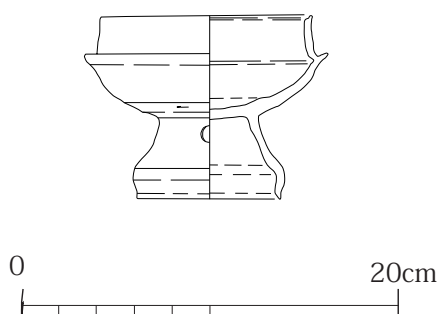


図 7 須恵器 U40-4 実測図（原田実測）



写真 10 U40- 4（原田撮影）

Ⅱ－6 出土地不詳の古墳時代須恵器（整理 No.USA14－1）

安國有真（L230888 文化遺産学専攻、3 回生）

1. 出土地・年月日

宇佐晋一氏によって寄贈された資料である。採取日及び採取地など遺物に関する情報は不明である。なお、遺物収納コンテナには「不明須恵器」の紙ラベルが入っていた。

2. 資料の特徴

USA14-1 は、須恵器の杯身である。口縁部及び受部が一部欠損するが、概ね完形である。

口縁部はやや内傾して短く立ち上がり端部はそのまま丸くおさめる。器形は全体的に浅く、扁平である。受部はやや上向きに短く外方へ伸び丸くおさめ流。受部上面にヘラによる 1 条の凹線が施されている。外面調整は、底部下位をやや粗雑なヘラ削りする以外は回転ナデである。底部付近は肉厚である。内面は見込み部をナデ、以外はロクロナデ。外面の底部から体部にかけて、灰白色の自然釉の付着が部分的に付着する。法量は口径 12.2 cm、器高 4.4cm である。

胎土は密で径 3mm 大の長石を少量含む。焼成は硬質で、色調は内面 7.5Y5/1 灰、外面 7.5Y3/1 黒褐～2.5Y7/2 灰黄、断面 7.5YR3/1 黒褐を呈する。

上述した形態や技法などの諸特徴から、本資料は TK209 型式古相に属すると推察される（田辺 1981）。

参考文献

田辺昭三 1966 『陶邑古窯址群 I』平安学園考古学クラブ

田辺昭三 1981 『須恵器大成』角川書店

大阪府立近つ飛鳥博物館 2006 『年代のものさし - 陶邑の須恵器 -』中島弘文堂

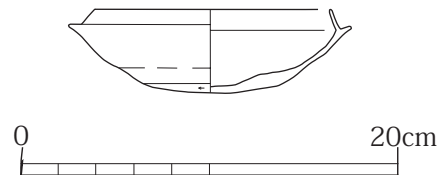


図 8 須恵器 USA14-1 実測図



写真 11 須恵器杯蓋 USA14-1



写真 12 須恵器杯蓋 USA14-1 内面



写真 13 須恵器杯蓋 USA14-1 外面

Ⅱ－7 美濃地域出土の須恵器杯身（整理 No.OK002・004）

原田しいな（名古屋大学大学院、文化遺産学専攻 2025 年度卒）

1. 出土地・出土年 不詳

2. 資料の観察

OK002 と OK004 は須恵器杯身である。

OK002 は、口縁部が内傾して立ち上がり、端部は丸くおさめる。受部はやや斜め上に引き出されている。全体的に器厚が厚く、特に底部から受部付近で厚みを増す。内外面はロクロナデ調整をし、外面はその後 1/2 ～ 1/3 程度回転ヘラケズリ調整をする。砂粒が左に動いていることから、回転ヘラケズリ調整の際のロクロ回転方向は右である。内面には、直径 4 cm 程のシッタ（当て具）の痕跡が残り、一部すり消されている。また、口縁部を除く体部外面には自然釉、底部外面にはガラス化した釉が付着している。さらに、受部にはセットと思われる杯蓋の口縁部破片が溶着していることから、杯身に杯蓋の口縁部が下になるように被せたものを逆さまにした状態で窯詰し、焼成されたと考えられる。

胎土は緻密で径 1mm 以下の長石を僅かと、径 5mm 大の長石を含む。焼成は硬質である。色調は、内外面が灰白色、断面が灰色である。法量は、口径 11cm、受け部径 13.3cm、器高 3.7cm である。

OK004 は、口縁部が内傾して立ち上がり、端部は丸くおさめる。受部はほぼ水平に引き出している。内外面はロクロナデ調整をし、外面はその後 1/3 弱回転ヘラケズリ調整をする。砂粒が左に動いていることから、回転ヘラケズリ調整の際のロクロ回転方向は右である。また、口縁部の内外面に自然釉が付着していることから、蓋を被せずに窯詰し、焼成されたと考えられる。胎土は緻密で、直径 2mm 以下の長石を普通量含む。焼成は硬質である。色調は、外面が青灰色、内面・断面が灰白色である。法量は、口径 11.2cm、受径 13.9cm、残存高 3.8cm である。

3. 年代について

いずれも岐阜県各務ヶ原市域出土と推察される。よって、当該地における渡辺博人氏による須恵器編年に基づき、両遺物の年代を求めたい。渡辺氏は、美濃地域における古墳時代後期の須恵器編年を、古墳から出土する須恵器蓋杯を中心に

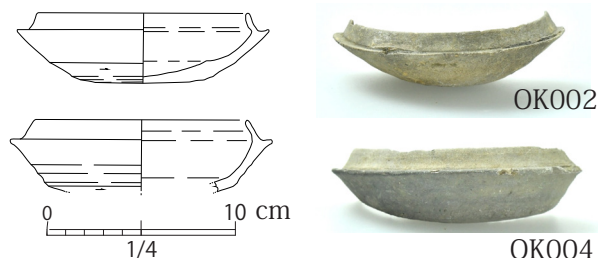


図9 須恵器実測図
（原田実測・トレース）

写真 14 須恵器

組み立てている（渡辺 1996）。渡辺氏は、美濃の古墳時代後期における古墳出土須恵器蓋杯を 1 型式～10 型式に型式分類している。美濃地域では、主に尾張系須恵器・畿内系須恵器・美濃系須恵器の、3つの系統の須恵器が出土するとされる。このうち、2 型式～7 型式には尾張系須恵器（2 型式～7 型式）と畿内系須恵器（2 型式～6 型式）の 2 系統が存在し、6 型式以降は美濃系須恵器が出現するとする。（OK002・004）は、その形態的特徴や、胎土、色調から、尾張系須恵器ではなく、畿内系須恵器または美濃系須恵器と考えられる。また、陶器窯系須恵器の色調は青～青黒色で重量感があるとされることから（渡辺 1992）、OK002 は美濃系須恵器、OK004 は陶器窯系須恵器と考えられる。前者を美濃系須恵器の型式にあてはめると、口縁端部を丸くおさめること、器厚が厚いこと、回転ヘラケズリ調整をしていることから、「美濃」系 6 型式となる。後者を畿内系須恵器の型式にあてはめると、口縁端部を丸くおさめること、回転ヘラケズリ調整を 1/3 弱していることから、「畿内」系 5 型式となる。

以上より、OK002 は「美濃」系 6 型式（田辺編年 TK209 型式古相併行、6 世紀後葉）（田辺 1981）、OK004 は「陶器窯」系 5 型式（田辺編年 TK43 型式新相併行、6 世紀中葉）の所産であろう。

参考文献

- 渡辺博人 1996 「美濃の後期古墳出土須恵器の様相―蓋杯の型式設定とその編年試案―」『美濃の考古学』創刊号 美濃の考古学刊行会
渡辺博人 1992 「須恵器と後期古墳」『美濃の後期古墳』美濃古墳文化研究会
田辺昭三 1981 『須恵器大成』角川書店

Ⅱ－８ 美濃地域出土の須恵器横瓶（整理 No.OK－１）

原田しいな（名古屋大学大学院、文化遺産学専攻 2025 年度卒）

1. 出土地・出土年 不詳である。

2. 資料の観察

須恵器の提瓶である。後世に口縁部と頸部が接合されているが、ほぼ完形品である。

口縁部は外上方に立ち上がり、やや屈曲して端部をつくりだす。頸部の長さは左右で若干異なり、右肩へ繋がる頸部の方が長い。また、頸部の中位には一条の沈線がめぐり、沈線は施文の始点と終点の位置がズレている。頸部をおよそ一周半しているため、二条の沈線が巡らされているように見える部分もある。口縁部外面には断面三角形の突帯が一条めぐり、口縁端部外面は一条の凹みをつくりだし、端部は丸みを帯びる。

体部は平面が正円形に近く、側面は片方が大きく膨らみ、もう一方が偏平な偏球形を呈する。大きく膨らむ面は閉塞側面、偏平な面は底部側面である。閉塞側面には全体にロクロ回転を利用したカキメ調整（原体幅 12 条 1 単位、同幅 1.4cm）が施されている。また、閉塞側面と底部側面の境あたりには、体部を一周するように一条の沈線がめぐり、

胎土は緻密で、直径 0.5mm 大の長石をやや多く含み、最大 3mm の長石を少量含む。焼成は硬質である。色調は外面が灰色、明オリーブ灰色、内面が暗青灰色である。また、外面の上半部、口縁部内面に自然釉が付着している。法量は、口径 9.4cm、器高 23.5cm、体部最大径 20cm、体部厚 13.4cm である。

3. 製作技法の復原

次に、製作技法について考察する。提瓶や平瓶、横瓶、長頸瓶などの瓶類の一般的な製作技法としては、北野博司氏が提唱した「風船技法」がある（北野 2001）。風船技法とは、体部を一旦風船状態にし、内部の空気圧を利用して加圧変形をすることである。提瓶と横瓶の成形工程はほぼ同じであるため、ここでは北野氏による風船技法と、春日真実氏による「横瓶の製作技法」（春日 2001）を参考にこの提瓶の製作技法を考察していきたい。

まず、内面を観察すると、底部にヘラ状の工具

で押さえて円盤状の粘土を作ったような痕跡がある。また閉塞側面には円盤状の粘土で、直径 4cm 程の穴を外から塞いだような痕跡がある。このことから、体部の製作技法としては風船技法で、製作過程としては、まず底部の粘土円盤をヘラ状工具で抑えてつくり、その周囲に粘土紐をある程度まで巻き上げて、ロクロの回転を利用したロクロナデを行い、そして粘土円盤で塞ぐといった製作過程が推測される。

次に体部外面の製作技法としては、カキメ、底部の手持ちヘラケズリ、沈線、頸部の接合痕があげられる。特にカキメの施し方は特徴的である。同心円状に一度に施すのではなく、カキメの単位が重なり合う複雑なカキメであることから、数回に渡って工具があてられたことがわかるなど、工人のクセをイメージさせる興味深い調整である。

沈線は閉塞側面と底部側面を区切るように体部に巡らされている。また、底部側面の手持ちヘラケズリは、沈線の約 2.5cm 離れたところから左回転で 1/3 程行われている。体部と頸部の接合付近には、接合する際に施されたと思われる凹線状のナデがみられる。体部の調整過程としては、底部の手持ちヘラケズリ、沈線、頸部接合のナデのいずれもカキメをかき消したり、カキメの上から施されたりする箇所がみられるため、カキメ調整が最初に行われたことが分かる。また、沈線は頸部接合時のナデによってかき消されている部分があるため、沈線を施した後に頸部を接合したことが伺える。

以上より、体部の調整過程としては、カキメ→（手持ちヘラケズリ→沈線、または沈線→手持ちヘラケズリ）→頸部接合といった調整の過程が推測される。

また焼成時には、自然釉が外面上半部、口縁部内面にのみ付着していることから、窯床面の傾斜に沿って窯詰めされ、焼成されたのではないかと考えられる。

4. 出土地と年代について

最後に、この提瓶の年代と出土地及び生産地について若干の考察を行いたい。

従来、提瓶は水筒としての機能をもつとされてきた。早い段階での提瓶についての研究は、濱田耕

作氏によるものがある(濱田 1930)。濱田氏は、提瓶は須恵器固有の器種ではなく、北方遊牧民等の液体を携帯する革袋形の容器に起原があるとし、中国や朝鮮を経て、古墳時代の日本へ伝わった可能性を指摘した。また、濱田氏は、肩部に付された双耳の形態に着目し、環状耳→鈎耳→瘤耳→消失という形態変化を指摘した。

以降の研究においても、提瓶は肩部に付された双耳の形態変化を重視して分類が行われてきたが、一方で宮下知良氏による別の視点による分類もなされている(宮下 1984)。宮下氏は、提瓶を双耳形態だけではなく、頸部の形態や口縁端部直下の段の形態に着目した分類を行った。宮下氏は分類・分析を通して、提瓶は肩部に双耳のあるもの(環状耳提瓶・角状耳提瓶・ボタン状耳提瓶)からないもの(無耳提瓶)、太い頸部から細頸部、頸部高の小さいものから大きいものへの漸次的な変化を指摘した。

宮下氏は分類を通して、提瓶を6世紀前半から7世紀後半ないしは8世紀初頭を4段階で変遷するとした。

以上の見解を本稿で取り扱った提瓶に当てはめてみると、無耳提瓶で比較的太い頸部かつ小さい頸部高をもっている。よってこの提瓶は6世紀前半の所産としたい。

また、出土地についてであるが、池上悟氏によれば、フラスコ形提瓶の祖形と考えられる無把手提瓶は、検出できた61例中53例中の87%が岐阜県・愛知県に分布し、その他は長野県や奈良県、静岡県に数点出土するのみである(池上 1985)。池上氏の論文の中で提示される各務原地区出土品の提瓶の形態と、本稿で取り上げた提瓶の形態は非常に類似しており、また保管場所が各務原市であったこと、完形品であることを考慮すると、この提瓶は各務原市内の古墳から出土した可能性が高いのではないかと考えられる。

参考文献

- 北野博司 2001「須恵器の風船技法」『北陸古代土器研究』第9号 北陸古代土器研究会
春日真実 2001「横瓶の製作方法」『北陸古代土器研究』第9号 北陸古代土器研究会
濱田耕作 1930「提瓶について」『東亜考古学研究』岡書院
宮下知良 1984「須恵器瓶類について」『日本古代文化研究』創刊号 古墳文化研究会
池上悟 1985「古墳出土の須恵器について～フラスコ形提瓶～」『立正大学人文科学研究所年報』23 立正大学人文科学研究所

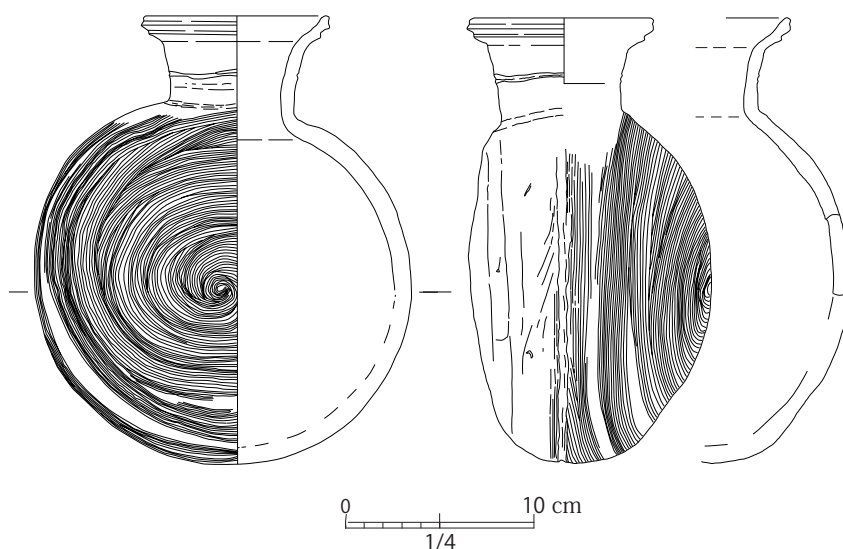


図 10 須恵器横瓶 OK-1 実測図 (原田実測・トレース)



閉塞底面



閉塞側面



側面

写真 15 須恵器横瓶 OK-1 (原田撮影)

Ⅱ－９ 長岡京市・井ノ内遺跡の弥生土器と須恵器（整理 No.SAK13-D13・D53）

〔SAK-013・053〕

1. 出土地・年月日

採取地及び年月日に関しては坂下勝美氏の聞き取りと資料に記載されている「井ノ内旭寺跡」の注記から 1966 年（昭和 41）頃か 1980 年の京都府立向日が丘支援学校の建設工事が行われている際に現在の京都府長岡京市井ノ内旭寺 11〔現京都府立向日が丘支援学校〕付近で採取されたものと推測される（龍谷大学文学部歴史学科文化遺産学専攻 2022・2025）。正確な出土年月日は不明である。

2. 資料の特徴

〔SAK-013〕 弥生土器である。口縁部から頸部にかけて短く外反する形状から短頸壺とみられる。口縁部の一部が残存している。残存率は全体が 5%、口縁が 10%ほどである。残存率が著しく低いため、反転復元はできなかった。技法に関して外面の頸部上半および口縁端部はヨコナデ、頸部下半はタテハケ、内面は全面にヨコナデの後、ヨコハケが施されている。胎土はやや密で直径 1mm 以下の長石および石英、雲母類を多く含んでいる。焼成はやや軟質である。色調は外面、内面、断面ともににぶい黄橙色を呈している。本資料は内面のヨコナデ痕から回転台を用いた成形であることが考えられる。また口縁部から頸部にかけて凹線文は見られず無文である。口縁部は外反し、下部に向かって肥厚し、窪んだ端面を形成している。以上の諸特徴から本資料は山城

安國有真（L230888 文化遺産学専攻、4 回生

第Ⅴ様式に属すると推察される（森岡 1990、若林 2015）。

元々、当該資料採取地である井ノ内旭寺付近は弥生時代後期に相当する井ノ内遺跡が該当する遺跡として周知されてきた（長岡京市 1991 山本 1989）。そして近年行われた発掘調査から井ノ内遺跡の西部に弥生時代後期の集落跡が存在することが確認された（福山 2025）。そのため本資料も井ノ内遺跡に包蔵されていたものと推察される。

参考文献

山本輝雄 1989「第 4 章 山城地域 I . 桂川流域の弥生遺跡」『京都府弥生土器集成』公益財団法人京都府文化財調査研究センター

森岡秀人 1990「山城地域」『弥生土器の様式と編年 ― 近畿編Ⅱ―』木耳社

長岡京市史編纂委員会 1991『長岡京市史 資料編一』

若林邦彦 2015「近畿」『考古調査ハンドブック 12 弥生土器』株式会社ニューサイエンス社

福山博章 2025「長岡京跡右京第 1299 次・井ノ内遺跡」『京都府埋蔵文化財情報』第 149 号 公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター

龍谷大学文学部歴史学科文化遺産学専攻 2022『考古学実習・文化財実習報告書』第 4 集

龍谷大学文学部歴史学科文化遺産学専攻 2025『2023・2024 年度龍谷大学文学部考古学実習報告書』



図 11 弥生土器実測図（安國実測）

写真 16 弥生土器（左：外面、右：内面、安國撮影）

〔SAK-53〕 須恵器の壺である。口縁部が少し外反しつつ立ち上がり、肩部がやや球形を呈していることから壺と考えられる。頸部の一部が残存しており、残存率は10%である。頸部は比較的残存していたため、反転復元を行った。頸部径は約4.2cmである。

頸部と体部では異なった方向にロクロナデが施されていることから口頸部と体部は二段接合によるものであると推察される(國下2005)。ロクロの精度が良いためか、器形が薄く挽き出され、器体に細かいロクロ目を残している。技法に関して頸部内外面はロクロナデ、体部上半はカキ目が施されている。

胎土は密で直径1mm以下の微細な黒色の粒子を少量含んでいる。焼成は硬質である。色調に関して内面は灰色、外面は灰白色、断面は紫灰色を呈している。器体は全面的に赤味を帯びる灰色を呈しているため、高温の酸化炎状態で焼成されたと考えられる。頸部の大部分に自然釉の付着が確認される。

以上の諸特徴から本資料は平城編年のV群(8世紀後半)に相当すると推察される(奈良国立文化財研究所1991)。また当該地は井ノ内遺跡とともに長岡京右京三条四坊八・九町付近であると推定され(福山2025)、長岡京跡の遺跡に関連する資料とも評価できよう。

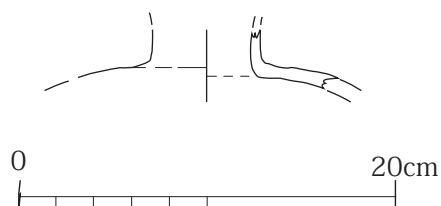


図12 須恵器 SAK-53 実測図
(安國実測・トレース)

参考文献

- 奈良国立文化財研究所 1991 『奈良国立文化財研究所学報 第50冊 平城宮発掘調査報告 XIII』 真陽社
古代の土器研究会 1992 『古代の土器1 都城の土器集成』 真陽社
古代の土器研究会 1993 『古代の土器2 都城の土器集成』 真陽社
古代の土器研究会 2001 『古代の土器研究会 第6回シンポジウム 古代の土器研究—律令的土器様式の西・東6 須恵器の製作技法とその転換—』 真陽社
中村浩道 2001 「平城京と須恵器」 『土師器と須恵器』 雄山閣
國下多美樹 2005 「長岡京出土土器の基礎的研究」 『向日市埋蔵文化財調査報告書』 第65集 向日市教育委員会
龍谷大学文学部歴史学科文化遺産学専攻 2022 『考古学実習・文化財実習報告書』 第4集 三星商事印刷株式会社
福山博章 2025 「長岡京跡右京第1299次・井ノ内遺跡」 『京都府埋蔵文化財情報』 第149号 公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター
龍谷大学文学部歴史学科文化遺産学専攻 2025 『2023・2024年度龍谷大学文学部考古学実習報告書』



写真17 須恵器 SAK-53 (安國撮影)

Ⅱ－10 京都市・上里北ノ町遺跡の縄文時代石器（整理 No.SAK014・019・023）

山中楓大（L230899 文化遺産学専攻 4 回生）

1. 採集年月日

遺物とともに同封されていた紙には以下のように採集日が記載されていた。

SAK019 1987 年 8 月 30 日

SAK023 2013 年 4 月 29 日

SAK014 2012 年 4 月 19 日

2. 採集地点

遺物とともに同封されていた紙には以下のように採集地点が記載されていた。

SAK019 西京区大原野上里北ノ町 910

SAK023 大原野上里北ノ町

SAK014 大原野上里北ノ町 910

地図を確認する限りでは「910」という番地に該当する土地は見受けられなかったが、古墳時代～室町時代の遺跡散布地として知られる上里北ノ町遺

跡の範囲内に位置するものと考えられる。図 13 には記載された住所を基に、採集地点の大まかな位置を示した。採集地点の南東方向には、縄文時代晩期の集落遺構が検出された上里遺跡が位置する。検出された縄文時代晩期の土坑や流路状遺構からは、石鏃を中心に多数の石製品が出土しており、なかには未製品や石器製作時に廃棄された剥片などがまとめて出土した土坑も検出されている^{（註 1）}。

3. 資料の特徴

今回整理報告を行う石器は、3 点とも打製石鏃である。先に記載済みであるが、本報告資料をそれぞれ SAK019、SAK023、SAK014 と呼称し、採集地点と近接する上里遺跡から出土した石鏃群を参考に観察所見を述べていく。なお、石鏃の形態分類および編年は上峯篤史氏の研究を主に参照した（上峯 2006、2018、2024）。

まず、SAK019 の石鏃を取り上げる。正三角形に近い形状の凹基鏃である。両面押圧剥離で成形さ

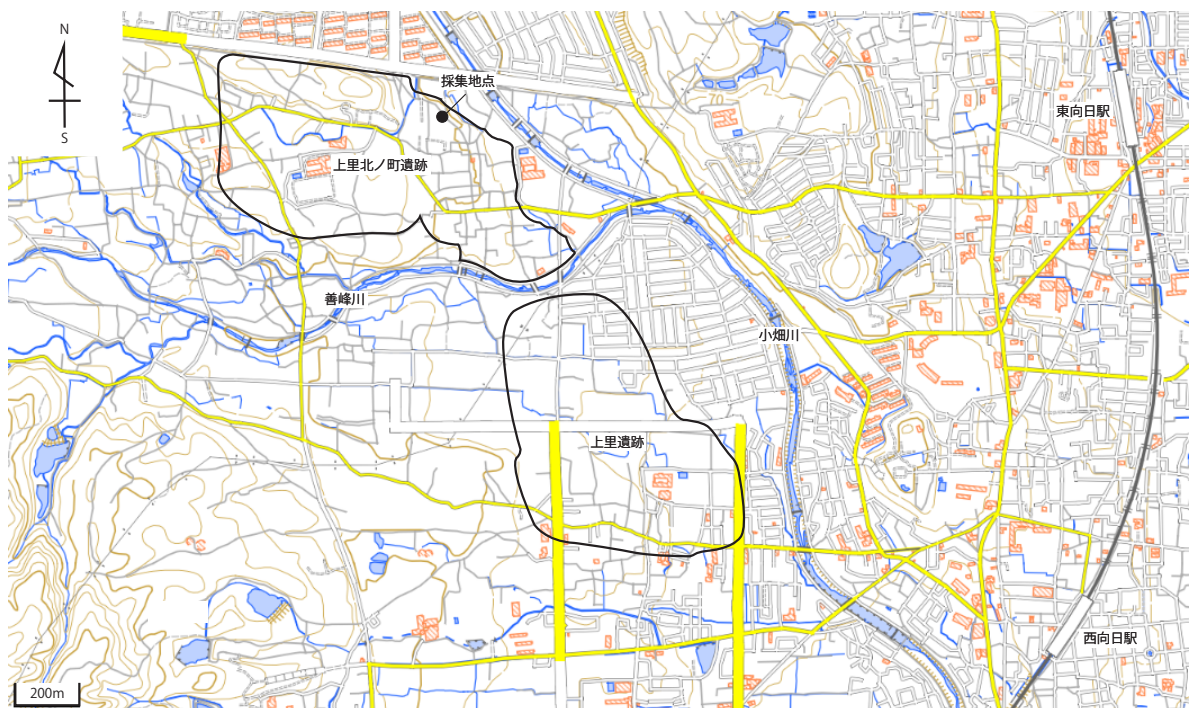


図 13 上里北ノ町遺跡と採集地点（山中作図、地理院地図に加筆）

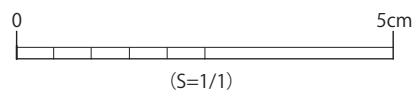
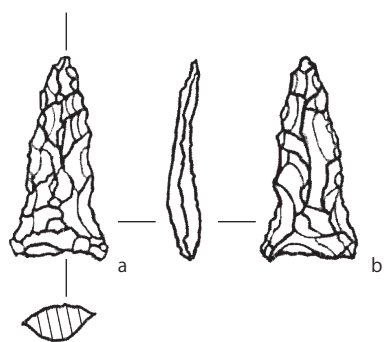
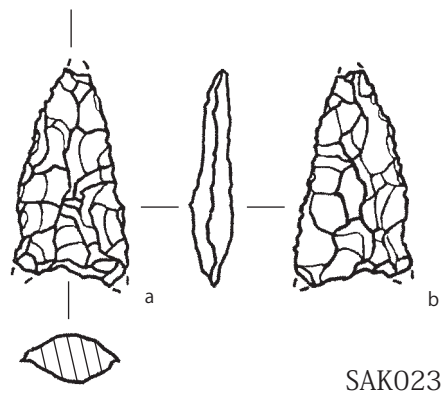
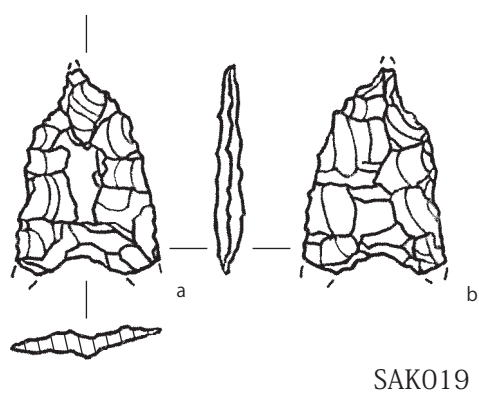
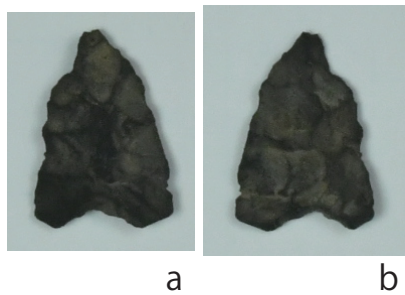
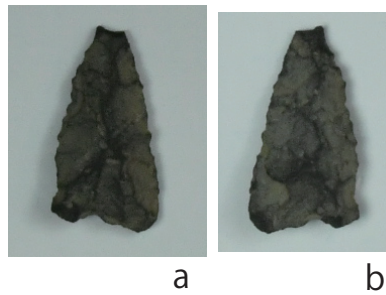


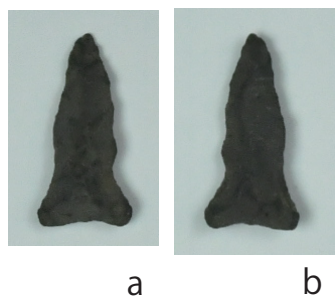
図 14 石鏃実測図（山中実測・トレース）



SAK019



SAK023



SAK014

写真 18 石鏃（山中撮影）

表－３ 上里遺跡採集の縄文時代打製石鏃（山中作成）

番号	採集地	基部	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	石材	形態
SAK014	大原野上里北ノ町	微凹基式	2.65	1.25	0.45	1.068	サヌカイト	微凹基鏃
SAK019	大原野上里北ノ町	凹基式	2.7	1.94	0.3	1.65	サヌカイト（二上山？）	三角鏃
SAK023	大原野上里北ノ町	凹基式	2.8	1.5	0.5	2.011	サヌカイト（二上山？）	鋸歯縁鏃

れ、素材面を残さない。b面は、a面と比較しても成形が甘い。最大長に対して厚みが0.3cmと薄い点が特徴であるが、両面ともに素材面が確認できないことから、薄手の素材剥片を使用した石器製作は想定し難い。

石材は肉眼による所見ではあるが、二上山産サヌカイトと考えられる。脚部と先端部は欠損しているため本来の形状は不明であるが、先端部側縁がやや大きく内湾し、基部が浅く挟まれる特徴は上里遺跡第13・16・18・19次発掘調査で出土した石鏃群に類例が求められる^{（註2）}。上記の特徴を持つ上里遺跡の石鏃はいずれも脚部が丸みを帯び、SAK019も同様の形態であった可能性がある。しかし法量を比較すると、ややSAK019が大型品である。

SAK023は、鋸歯縁を持つ二等辺三角形の凹基鏃である。全面押圧剥離成形で、b面の加工がやや甘い。両面ともに風化が著しく、先端部と脚部は欠損している。側縁は直線的で、基部の挟りは浅い。最大厚は0.5cmであり、素材面を残さない程度に厚めに加工されている。上記の特徴を持つ類例は、上里遺跡出土の石鏃群に求められる。石材は肉眼観察ではあるが、二上山産サヌカイトと考えられる。

最後にSAK014を取り上げる。ほんのわずかながら側縁がS字状に内湾する二等辺三角形の凹基鏃である。両面とも押圧剥離成形で、b面は素材剥片の形状または押圧剥離成形に起因する凹みの特徴的である。また、基部の挟りは極めて浅く微凹基鏃に分類しうる。脚部は側縁側が丸みを帯び、端部に角を持つ。SAK014は他2点の石鏃と比べると小型であるが、上里遺跡出土の石鏃群には1gを下回る小型品が多く、中型品に位置づけられる法量である^{（註3）}。

石材はサヌカイトと考えられるが、SAK014のみ色味と石質が大きく異なる。他2点の資料とは原産地を異にする可能性が高いが、肉眼観察の限りでは金山産サヌカイトの特徴は見出せなかった。原産地に関する詳細は他の資料も含め課題として残ってしまった。

4. 資料の評価

以上3点の打製石鏃について、観察時の所見を述べてきた。古墳時代～室町時代の遺跡散布地として知られている上里北ノ町遺跡の範囲内から、縄文時代晩期まで遡る可能性のある打製石鏃が採集された歴史的意義は大きい。

近接する上里遺跡から出土する晩期の石鏃群は、主に先端部に肩を持ち基部の挟りが浅い五角形鏃、脚部が大きく広がる角脚鏃、端部がわずかに外側へはね返る長靴鏃からなる。上峯氏の石器群編年によると、晩期は五角形鏃の発達期にあたり、上里遺跡の石鏃については滋賀里Ⅲa式の土器とともに出土する角脚鏃・五角形鏃を「様相10古段階」、篠原式中段階の流路状遺構18－1215から集中して出土する長靴鏃を主体とする石器群を「様相10中段階」と位置付けている^{（註4）}。本報告資料は先端部および脚部の残存しない資料が多いこともあって、时期的な位置付けは困難であるが、成形法や全体形状から、いずれも縄文時代晩期の所産と考えられる。石材の原産地に関しては、二上山サヌカイト製と考えられる資料が2点ある。上里遺跡における石材原産地の比率は二上山産が6割、金山産が4割であり、一部黒曜石製の石器が混じる。

さらに、金山産の石器には大型品が多いという傾向が指摘されていることから^{（註5）}、SAK019・SAK023が二上山サヌカイト製である可能性は高い。また、上里遺跡と同じ「様相10段階」の石鏃が多量に出土している滋賀県大津市の滋賀里遺跡の石材原産地も二上山産6割、金山産4割の比率であると指摘されている^{（註6・註7）}。

最後に本報告資料について、形態・法量・石材の観点から、SAK019とSAK023は上里遺跡出土の縄文時代晩期の打製石鏃に類例を求めることができる。どちらも脚部と先端部を欠損しているため推測の域を出ないが、報告書の分類案を参照すると、SAK019は主に、長さとの比率が約3：2となるB類の凹基鏃や、幅が広く先端部が尖るF類の凹基鏃に分類しうる。SAK023は側縁部が直線的な二等辺三角形の凹基鏃であることから、C-2類に属するものと考えられる。SAK014については報告されている資料とは形

態がやや異なり、提示される分類案にはあてはめにくい。基部の挟りが浅いという点は共通し、縄文時代晩期以降の所産とは考えられる。SAK014 は先述した通り、側縁が緩やかな弧を描くように内湾する。これは縄文時代晩期に発達する五角形鏃にみられる特徴で、先に挙げた遺跡の他に大阪府大阪市長原遺跡^(註8)、兵庫県神戸市大開遺跡^(註9) から出土する石鏃群が挙げられる。これらの遺跡からも五角形鏃が出土しているのだが、石鏃に占める五角形鏃の割合が半数以下と少数派であることから、「様相 10 中段階」に後続する「様相 10 新段階」であり、五角形鏃および角脚鏃の衰退期に位置付けられている^(註10)。なかには肩部が比較的不明瞭かつ内湾の弱いものも確認でき、SAK014 が「様相 10 中段階」以降の五角形鏃に含まれる可能性はなくもないが、両面の剥離痕跡を観察した限りでは肩部を意識した成形であったとは言及しにくい。本報告では個体差の大きい中型の微凹基鏃という評価にとどめておきたい。

註

(註1) (財)京都市埋蔵文化財研究所 2010『上里遺跡－縄文時代晩期集落遺跡の調査－』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第24冊 (財)京都市埋蔵文化財研究所

(註2) 註1文献と同じ

(註3) 註1文献と同じ

(註4) 上峯篤史 2018『縄文石器 その視角と方法』京都大学学術出版会

(註5) 註1文献と同じ

(註6) 上峯篤史 2024「縄文時代後期後半～晩期前葉における石鏃製作の技術と構造」『京都大学構内遺跡調査研究年報 2024 年度』京都大学大学院文学研究科附属文化遺産学・人文知連携センター京大文化遺産調査活用部門

(註7) 滋賀里資料研究会 2023『滋賀里遺跡資料図譜』真陽社

(註8) (財)大阪市文化財協会 1982『長原遺跡発掘調査報告Ⅱ』(財)大阪市文化財協会

(註9) 神戸市教育委員会・(財)神戸市スポーツ教育公社 1993『大開遺跡発掘調査報告書』神戸市教育委員会・(財)神戸市スポーツ教育公社

(註10) 註4文献と同じ

参考文献

東潮 1988「武器」『季刊考古学 縄文と弥生を比較する』第23号 雄山閣

上峯篤史 2006「両極打法による剥離実験－異種剥離方法の同定を基礎とした資料体作成にむけて」『旧石器考古学』68 旧石器文化談話会

上峯篤史 2018『縄文石器 その視角と方法』京都大学学術出版会

上峯篤史 2018「縄文石器の系統と原材」『実証の考古学－松藤和人先生退職記念論文集－同志社大学考古学シリーズⅫ 同志社大学考古学シリーズ刊行会

上峯篤史 2024「縄文時代後期後半～晩期前葉における石鏃製作の技術と構造」『京都大学構内遺跡調査研究年報 2024 年度』京都大学大学院文学研究科附属文化遺産学・人文知連携センター京大文化遺産調査活用部門

川添和暁 2005「縄文時代後晩期の石鏃について－一部分磨製石鏃を中心に－」『研究紀要』第6号(財)愛知県教育サービスセンター・愛知県埋蔵文化財センター

田井中洋介 1998「滋賀県における弥生時代の石鏃の変遷についての素描」『紀要』第11号(財)滋賀県文化財保護協会

長谷川達 1991「京都府南部の縄文遺跡」『京都府埋蔵文化財論集』第2集(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

山口譲治 1988「石器」『季刊考古学 縄文と弥生を比較する』第23号 雄山閣

2025 年度龍谷大学文学部考古学実習報告書

編集・発行 龍谷大学文学部歴史学科文化遺産学専攻

発行日 2026 年 7 月 31 日

〒 600-8268 京都市下京区七条通大宮東入大工町 125-1

